



ウナネ神

はじめに

かつて東北地方には、来歴不明の神々が祀られていました。現在ではほとんど姿を消してしまい、その正体を明らかにする史料もありません。例えば、ホウリヨウ神、ニハタリ神などという神々がそれらにあたり、柳田國男は東北独自の神として注目していました。

そのような神々のなかに、ウナネ神と呼ばれる神があり、旧仙台藩では領内に鎮座していたこの神について「何の時代、何人が何神を勧進せるかを知らず」と記録しています。このように謎に包まれた神ですが、その神名や鎮座地の地形などから、用水の神、または洪水除けの神だったのではないかと考えられています。

ウナネ神

ウナネ神の「ウナネ」は、「宇那根」または「宇奈根」などと書かれます。その他、雲南・運南・宇南・卯名な

にこの地域で多くの水田開発がなされた折に勧進されたという説を打ち出しました。

さらに三重県に古い記録を持つ宇流富志禰神社が存在し、記紀などに残る古語によって「ウナネ」の意味が説明できることから、ウナネ社は東北独自の神ではなく、中央からもたらされたと推測しています。

洪水除けの神？

一方、用水の神ではなく、洪水除けの神という説もあります。例えば、ウナン神については祭神を虚空蔵菩薩とする伝承が多くあり、それに伴うウナギに関する伝説やウナギの食物禁忌が報告されています。

虚空蔵菩薩は災害消除の性格を持ち、さらにウナギを神の使いとするため、これを食ってはならないとされています。神奈川大学教授の佐野賢治氏は、東北地方にありながらも宮城県はウナギが多く分布する地域であることや、洪水の減水期に出現する性質があることに注目しました。さらにウナン神が旧仙台藩における新田開発地域に多く見られると述べ、近世の新田開発の促進によって、人々が洪水に被災する機会が増え、減水期に出現するウナギと洪水との関連が、強く印象付けられたのだといえます。

そして、東北地方に進出していた真言系修験者が、ウナギを媒介とし

どの字があてられた「ウナン様」「ウナン権現」「ウナ権現」といった、現在も残る小さな祠に祀られる神々も、本来はウナネ神だったと考えられています。

この神が記録されている最古の史料『日本三代実録』には、その貞観三年（861）四月十日条、ついで貞観十五年（873）九月廿七日条に「宇奈根神」がそれぞれ従五位下、従五位上に官位が上がったと記されています。

ウナネ神の分布

これは現在の三重県名張市に鎮座する宇流富志禰神社のことだと推定されていますが、近畿地方の宇奈根社はこの一社のみしか確認されておらず、その分布は圧倒的に東北地方に多く、「ウナネ」や「ウナン」に音通する地名と江戸時代中期の分布状況から岩手県南部、宮城県北部に集中していたと考えられています。

て虚空蔵信仰を新田開発地域に導き入れ、ウナン神が誕生したのだと考えました。

ウナネは頸根？

信州大学教授の牛山佳幸氏は、佐野氏と同じくウナネ神は洪水除けの神としながらも、独自の説を展開しました。例えば、大石氏の用水口説については、「ウナネ」を用水口とする史料的前例がないこと。また必ずしも湧水や用水口付近に鎮座しているわけではないと反論して用水神説を否定しました。

さらに、同じく洪水除けの神とする佐野氏の説についても、ウナネ神は必ずしも旧仙台藩の新田開発地域に分布してはいないことを指摘しました。実際、私が佐野氏自身の論文に掲載されている新田開発地域とウナン神の分布表を見ても、もっとも開発石高の多い地域にウナネ神が存在しないなど、明確に疑問が残る内容になっています。

そこで牛山氏は、ウナネ神が祀られた地域は氾濫が多い地でもあり、特に河川が大きく湾曲した場所に祀られているとしたうえで、『延喜式』の祈年祭祀詞式に「宇事物頸根衝抜・・・」（意訳・あたかも鶴が頸を水中に衝き入れるように、首を前へ深く垂れ下げて敬い拝し・・・）とあることから、ウナネは頸根のことであり、「鶴が長い

金色堂で有名な岩手県平泉の中尊寺の莊園を描いた『中尊寺領骨寺村絵図』に「宇那根社」が描かれていることから、すでに中世にはこの地方にウナネ社が存在したことが明らかになっていきます。しかも、大きな樹を伴う目立つ神社として描かれていたため、骨寺村にとって重要な存在だったようです。



「中尊寺領骨寺村絵図」(在家絵図)に描かれた宇那根社 (写真提供: 関山 中尊寺)

頸を曲げて水中に突き入れるように「河川が大きく曲がった地形に祀られた洪水除けの神だと結論づけました。

いくつかの疑問

しかし、牛山氏の説については、3つ4つの例をもって鎮座地の形状を論じたにすぎず、またその数例の中でも本当に河川が湾曲していると見えるのか、疑問な場所も含まれています。

また、大石氏の奥州藤原氏との関連を指摘した説については、中世期の史料がないため仕方がないので、江戸時代の分布状況から述べたものであって、藤原氏全盛期の記録

その他は、東京都世田谷区と神奈川県川崎市高津区に「宇奈根」、群馬県邑楽郡板倉町に「宇那根」という地名が残っており、かつてウナネ社が祀られていた可能性があるにとどまっています。

用水の神？

そしてウナネ社の多くは田の中であり、しかも湧水や用水の取水口近くに祀られていた例があることから、用水の神だったとするのがほぼ定説となっています。東北学院大学名誉教授の大石直正氏は、「ウナネ」という神名についても、古語では灌漑施設である用水溝を「ウナデ」と読ませていることから、溝（ウナデ）の根（ネ）である取水口を意味すると言います。

大石氏はウナネ神、ウナン様の分布が平泉を中心とした、かつての奥州藤原氏の直轄領とほぼ重なるとして、その関連を指摘し、12世紀頃からの論旨ではありません。さらにウナネ神の出自を東北独自の神ではなく、中央からもたらされたという点については、何故、本場のはずの近畿地方ではウナネ神が三重県の一社をのぞいて記録にも残っていないのか疑問が残ります。

おわりに

ウナネ神は、その多くが水田や、湧水の近くに祀られていたことから、田に関連する神であったようですが、時代を経るにつれて田を守り稲を育むための、さまざまな利益が期待されたと考えられます。人々に期待される神徳は、随時付加されていくものであり、それは現代に祀られる神社を見ても明らかです。私が見る限り、ウナネ神の鎮座地と推定される数例についてすらも、水と田の近くという以上の特長を持ち合わせていないように思えます。新しい功德が加われば、新たに祀られる場所も若干変化するのもかもしれません。

このように考えれば、中世以前のまとまった史料でも発掘されない限り、ウナネ神の来歴を明らかにすることは、今後もなかなか難しいでしょう。

(文：江口知秀)



地元では宇那根神社と呼ばれていた群馬県板倉町宇那根の諏訪神社